

六条御息所の造型

—自己表現としての物怪—

古川 忍

序

『源氏物語』正編において「葵」―「鈴虫」まで十二巻で「六条御息所」は特異な属性をもつ女性として点描される。その個性は強烈で、読者（聴き手）¹に鮮烈な印象を残して、物語から退場していく。その間、生霊として、死後また死霊となって登場する。御息所は、源氏の愛人として、前坊の姫宮の母として造型され、日常的、物理的時間、空間を超え、生霊、死霊となって源氏の前に姿を現し、その周辺の人々の生涯にさまざまな影響を及ぼし、源氏から疎まれしかしなぜか追憶される女性である²。

それゆえ、六条御息所を語るとき、生霊、死霊を無視しては語れない。六条御息所の物語は、単に怪奇性だけを強調するために、書かれたものではないだろう。言い換えれば、作者は怪奇性漂う生霊、死霊を物語に登場させて、何を語りたかったのであろうか？それを明らかにすることに

よって六条御息所―古代の上の品の女性―の物語の本質に迫ってみたいと考えるのである。

葵巻に入って、

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮齋宮に
たまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを
幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやなま
しとかねてより思しけり³。

「まことや、かの…」と既知の事実を語り出す形で登場する六条御息所は、前東宮妃であり、齋宮に卜定された姫宮とともに、六条京極にゆつたりと住みなし源氏の愛の下降線に思い悩む女性である。「まことや」で呼び起こされ初めて六条御息所と冠された貴婦人は、登場と同時に、も

はや物語では傍流の女性であり、娘斎宮と一セットで語られるべき人であった。桐重院に「皇女たちの列になむ思」⁵ われる姫宮（後の秋好中宮）と、上の品としての登場であると同時に、登場の初めより悲劇の影を背負っている。

母御息所は上の品としての教養をすべて備えた人であったにもかかわらず、源氏の愛は遠のいてしまった。決定的には、葵の上に跳梁した御息所の生霊と対面した源氏には心憂しと思ふ気持ちと疎ましさだけが残ったのである。

さて、頼りにならない源氏との仲を自ら断念した形での伊勢下向の日、斎宮母娘は参内なさって「あいさつなさる。

父大臣の限り無き筋に思し心ざしていつきたてまつりたまひしありさま変はりて：十六にて故宮に参りたまひて二十にて後れたてまつり、三十にてぞ、今日また九重を見たまひける

そのかみを今日はかけじと忍ぶれど

心のうちにものぞかなしき

宮は十四にぞなりたてまつりたまひにける。いとゆゆしきまでみえたまふを、帝心動きて、別れの櫛たまふ…。

（賢木）

父大臣に、将来は帝の妃とまで期待をかけられ、大事に養育されて入内された、そのかみはもはや遠い過去のものに

なつてしまった。源氏に疎まれ、斎宮とともに伊勢下向を決意し、今斎宮の付添いとして再び宮中に入られた。もはや主役は娘であり母である御息所は添え物である。東宮に寵愛され、将来を約束されたかみへきた過去はその華やかだった分だけ余計みじめになられたろう。御息所は亡くなった父大臣の怨念も背負って生きてきたのである。

それにひきかえ、十四歳、少女から大人の女へ変わる時、物語のヒロインの年令になった斎宮は、朱雀院を魅了した。もはや、源氏の関心も母御息所から斎宮へと移っていた。

結局、車争いの結果としての正妻葵の上の死は、殺された葵の上ばかりか、殺した御息所にとつても最大の不幸であった。御息所が担った役割は、葵の上と差し違えるような形で、⁶ 自分もまた物語の表面から姿を消す、つまり葵の上と六条御息所という上の品の女性の源氏の身辺からの排除であり、新しいヒロイン紫の上、あのお慕わしい紫の人、そのゆかりの人を正妻格として登場させることであった。

つまり、古いものが消え、その後新しく紫の上と冷泉帝とが浮上してくる構図であるといえよう。

大朝氏は、これを次のように表現されている。⁷

源氏の最も痛烈な青春の体験であった藤壺が地上に残した二つの分身、冷泉帝と紫君とがそれぞれ源氏世界の内

実としてクローズアップされるのが桐壺帝の讓位であり、葵の上の逝去なのであって、ここに至って源氏は完全な自前の主人公に脱皮するのである。

これを御息所の立場でいえば、実子秋好中宮を帝の后におくり、その享受者にはなれなかつたが、換言すれば生霊となつて葵の上を取り殺し、物語の表面から姿を消すが、それは源氏世界—六条院栄華の支えを築いたことになる。しかも、源氏は中宮の背後に母の影を見続けることになる。

六条御息所の物語は、秋好中宮をその傘下に含むことにより、死霊の意味もより明らかになり、物語もより彩りをまじし、その中で占める位置もはっきりして来るのではなからうか。

二

葵の上が物の怪に悩まされるところで、しうねく取り憑いて離れない物の怪が一つあることが書かれている。「物の怪、生霊、死霊などいふもの多く出て来てさまさま名のりする中に、人にさらに移らず、…」このように『源氏物語』では、「物の怪」、「生霊」とあまり明確に区別されていない。ここでいう物の怪と生霊とはどう違うのか。

藤本勝義氏は次のように分析されている。⁽⁸⁾

「物の怪は、…原始的な精霊といった義があらう。我々の

感覚に直接訴えてくるものが物の怪であり、そうした現象の根拠として要求された、人格的な存在の表現が霊であると考えられた。」と。

『源氏物語』では、「物の怪」に対して「霊」が少ない、記録類、文学作品にも全くというほど出てこない、ともいわれる。また、橋本真理子氏は「源氏物語以前の竹取物語には物の怪に関する用例がなく、落窪物語にいきすだまが一例あるにすぎないが、『源氏物語』には物の怪は五十例に及んでいる、⁽⁹⁾」という。

では、なぜ全くというほど使われない「生霊」という言葉を使ったのか、「すぐ後の、六条御息所や紫の上の生霊について周匝が考え出す文脈を円滑に導入する機能」(藤本氏)とある。

私は「生霊」は所謂政治的背景をもたない六条御息所、女個人の霊、怨みというものを強調したいため、あるいは一種の妻みを出すため「物の怪」ではなく、馴染みのない「生霊」という言葉を使ったのではないかと考える。

なぜなら、政争激しいこの時代にあつて、藤原氏一族間の政権闘争は熾烈を極めていたに違いない。一条天皇の寵愛が大きい中宮定子(道隆女)を排除せんと道長は女彰子を入内させ定子を皇后におしあげた。その彰子の女房だったのが紫式部。闘争に何を見たであらうか。一条天皇の土

御門邸行幸の際、駕輿丁の苦しげな姿に己を觀照する作者。⁽¹⁰⁾紫式部は、当時の物の怪信仰をある意図をもって物語に採用した。一般には政治的陰謀、政治的敗者の怨みなど社会の暗黒面を象徴する物の怪、生霊を男女間の愛憎の妻さ、またそこから脱皮しようとする苦悩を象徴するものとして意図したのではなからうか。

三

ところで、紫式部の物の怪観として『紫式部集』四四番歌がある。⁽¹¹⁾

絵に、物の怪憑きたる女のみにくき図書きたる後に鬼になりたるもとの妻を、小法師のしばりたる図書きて、男は経読みて、物の怪責めたるころを

亡き人に託言はかけてわづらふも
をのが心の鬼にやはある

物の怪とは「をのが心の鬼」——本人の良心の呵責、疑心暗鬼が生み出す現象なんですよ、と式部は言う。作者には、物の怪とは「心の鬼」という考えがあつて、六条御息所と葵の上との「御車の所争い」を描いたのである。

源氏に冷淡にされ、物思いに乱れている御息所は心の慰

めにもなろうかと、こつそり齋院の御禊の日に見物に出かけたが、その日は物見車がすきまなく立ち並び、遅れて来た葵の上の車のお供衆に押し退けられ、楊なども折られ、お供衆には侮蔑的に扱われる。忍びがばれて御息所は身の置き所もない。帰ってしまいたい。しかし、源氏の行列が来た。薄情な源氏が、さすがに待たれるというのもなく心弱いことであろう。源氏は葵の上を認め、お供衆も敬意を表し通つていく。わが身と引き比べ、正妻葵の上のなんと晴れがましく、幸せな姿であろう。草木も靡く源氏の正妻とは。御息所にも東宮妃の時代があつた。やはりこの日の葵の上のように輝かしい日が。

かげをのみみたらし川のつれなきに

身の憂きほどぞいとどしらるる

と涙のこぼるるを、人を見るもはしたなけれど、目もあやなる御さまたちの、いとどしういではえをみざらましかば、とおぼさる。
(葵)

御息所の心、あはれである。哀しい女の心である。作者はここで、式部卿の宮、朝顔姫君の父娘もこの日の源氏に心動かされた人であることを描いていく。しかし、姫君は「いかで人に似じと深う思」し源氏と一定の距離を置く

係を保っている。なぜなら御息所への源氏の扱いを見てきたから。冷静で自己抑制力ある貴婦人として描く。

その一方、葵の上は「御物の怪めきていたうわづらひたま」うのである。物の怪はしうねく取り憑いて離れない。

また、六条御息所にとって、車争いで思い知らされた数ならぬ身の屈辱は、源氏の子を宿した正妻葵の上への妬み、その結果怨念へと変わっていく。

御息所はつれない源氏に絶望しつつ、やはりどうしてもあきらめきれない。しかしおめでたの葵の上の身は案じても気分がすぐれず思い悩む御息所への源氏の心配りはない。このような状態の中、物の怪の憑霊事件は起こった。

整理すると①御息所の深まる苦悩―不安定な精神状態「御心地も浮きたる」ようであり、伊勢下向を知りつつ留めもしない源氏を、なおかつ慕う御息所。②葵の上への物の怪憑霊事件―しうねき物の怪一つあって、源氏の外歩き途絶える。

③源氏の御息所訪問―「常よりも心苦しげなる御気色」で源氏の訪問にもうちとけない二人。

④御息所の異常心理―「すこしうちまどろみたまふ夢には…引きまさぐり…うちかなぐる心」

大殿には、御物怪いたう起こりて…この生霊、故大臣の

御霊などいふものありと聞きたまふ。…身一つの憂き嘆きよりほかに、人をあしかれと思ふ心もなけれど、物思いにあくがる魂はさもやあらむ…
(葵)

意識しないが、あくがれ出た魂が葵の上に憑霊しているらしい。その上、父大臣の厭わしい噂のたつことは耐えられない。斎宮の二度目の御禊の準備もせず、「ほけほけしうて」御息所はふし悩むのである。

⑤葵の上のつくろわれないお産姿に、源氏は可愛らしさとなまめかしさを感じ、初めて妻を理解するが、その際、物の怪はついに姿を現した。「ただそれなるありさまに、あさましとは世のつねなり」と、源氏は、ただただ疎ましく、心憂く、御息所を厭わしく思う。その中、葵の上に男児が誕生する。周匝は赤ん坊に氣をとられてしまっている。

⑥葵の上の安産を聞いた御息所は心穏やかでない。危ないと聞いていた葵の上が安産だったとは、まあ妬ましい。髪を洗い、衣を替えても、芥子の香が染みついている。御息所の精神は狂乱がつのっていく。

こは、御息所と葵の上に同時に進行している事件の経過を対比的に示し臨場感を出すのに回り舞台の手法が用いられている。

車争い後の孤独な御息所の心境と冷淡な源氏と、正妻の妊

娠、出産。それゆえか源氏に執着する心の挟間で半狂乱になつていく。孤独が妄想を呼び、それがまた孤独を呼ぶ。

その中で、魂の遊離「身」と「心」の分離。これを、野村精一氏は次のように分析されている。¹³⁾

世評を気にする、現心と己を充足しようとする感情、

物思ふにあくがるなる魂との二元的分裂なのである。

…この現実と自己の間の内的振動が自制の抑制とやみがたい情意との間を行きつもとどりつしているのであり、そのこと自身により、その情意の奔騰と分裂とを悲劇的に高めていくのである。

これでもか、と畳みかけるように冷徹に書き続ける作者。

そうして、ついに来た。除目のため手薄になつた左大臣邸で葵の上は息絶える。晩秋の悲哀深まる朝ぼらけ、御息所からお悔みの和歌が来た。そのお返しに、源氏は、

とまる身も消えしもおなじ露の世に

心おくらむほどぞはかなき

かつは思し消してよかし

(葵)

源氏からの最後通牒であつた。御息所は、「心の鬼」に照

らし、全てを思い知つた。煩悶はなほだしい御息所の追い詰められた極限状態から破綻をきたした精神のバランスの崩壊が、魂の遊離となつてあらわれ、行き場のない執念が生霊となつて姿をかえ生霊事件となつたものだと考えられるが、女が源氏に執着すればするほど、源氏の心は離れていく。御息所が生霊となる内的必然はそろつていた。御息所の極限を超えた精神のバランスの崩壊、それは源氏の冷淡さと車争いでの屈辱、数ならぬ身の再認識。反対に晴れがましい葵の上、万人が認める源氏の正妻への狂おしいまでの嫉妬、キッカケを契機に憎しみに転換する感情、自分で失望する心、深まる懊惱。御息所は心の鬼に照らしてすべてを理解した。二人とも自己暗示のため幻視した生霊事件だったのである。

ところで、明石巻に見える桐壺院の亡霊であるが、源氏の須磨流謫後、京では天変地異、須磨では雷鳴、高潮の中、朱雀帝は夢で桐壺院に睨まれ眼病を患う。母太后に申し上げられると、雨など降り天候の悪い日には、そうと思ひこむことが夢などに現れるといわれる。弘徽殿太后の発言であるが、これまた恐ろしく科学的なものである。作者が大后を通して言わせたものと思われる。つまり、朱雀帝の見たものは、故桐壺院の遺言を反故にする形となり、父帝への良心の呵責が夢で幻視されたものということになる。

こうして、作者は野宮の別れを設定し、御息所は伊勢へと下向していく。荒涼たる嵯峨野一帯の風景描写は、不毛の恋の心象風景であると同時に、齋宮に付き添って伊勢下向という形で、宮廷社会からドロップアウトしていく女の境界線とも考えられる。嵯峨野の一帯の原野は全てを諦めた女の寂しい心を映すバックミュージックともいえる。¹³

『源氏物語』に登場する上の品の女性のほとんどが、自分の意志で自分の身の振り方に対処することの難かしかった時代に、御息所や中の品の女性、空蟬を描いたは、作者にはつきりした意図があったと思われる。空蟬は自己抑制で御息所は外的半強制と、形に差はあるものの、どちらも自分の意志で源氏から離れていくことに変わりはない。

また上の品の朝顔宮は心魅かれつつも、一定の距離を保つという否定的形で、常に源氏世界から自分を切り離している。御息所は、源氏から思い切られるという形で自分の意志を決定したのであるが、そのことがあって初めて、父大臣の描いた生から、自分の意志で決定した生への転換をしたのである。結果的には源氏に愛され続ける存在ではなく、半強制の形でしか自分の生を選べなかったが、生の不幸と入れ替わりの形で、哀しい生の自由を手に入れたといえないだろうか。作者はこのことをはつきり認識していたのではなからうか。

四

まことや、かの齋宮もかわりたまひにしかば御息所のぼりたまひて後：御心ばへのなかなかならむなごりは見じと：渡りたまひなどすることはなし（濡標）

姫宮のことを遺言に託された。「齋宮だけは色恋の憂き目とは縁のないものにしてあげたい、と思う」と。御息所の死後、源氏は入道の宮（藤壺）と図り前齋宮を冷泉帝に入内させられた。朱雀帝を出し抜く形で。二月、女三宮も一人の紫の縁の一人が正妻として六条院に迎え入れられたが（若菜上）宮の幼さは、紫の上の完璧さと上への愛情を確認させる結果となった。しかし、その完璧さは源氏に不吉な予兆を感じさせる。一方、紫の上は、自ら女三宮に対面を申し出られるが「我より上の人やはあるべき」と思い続けられる。だが、紫の上の寂寥はついついいき出家を願われる。若菜下巻で紫の上の危機的年令、藤壺崩御の年三七歳が源氏の口から発せられる。女案の後、紫の上との語らいて自分の半生、過往の女性の回想、それが引き金になったごとく紫の上の発病が語られる。

「夜更けて大殿籠もりぬる暁方より御胸を悩みたまふ……」（若菜下）御胸悩む、は葵の上に生霊が憑依した時と同じ

表現である。しかも、源氏の女三宮訪問の夜であった。源氏は紫の上が正妻格として住みなしていた寝殿へ訪れていたのだ。

源氏は紫の上の寂寥に全く気づいていない。

君の御身にはかの一筋の別れ（須磨）より、あなたこそな物思ひとて心乱りたまふばかりのことはあらず

（若菜下）

あなたご自身は、須磨流離一件のほか物思ひのない事でしょう。親のもとで過ごされた同然の気楽さは並みはずれて幸運だったと言うべきでしょう。過往の女性の中で、源氏の女性評は、紫の上の「ありさまに似たる人なかりけり」にすべて収束される。源氏の紫の上賞賛は育てた自分への賞賛が強い。紫の上はもはや源氏を離れたところで悩み嘆いている。出家が切り出されるが源氏は許さない。

「絶え入りたまひぬ」と知らせの人がまいった。茫然自失、ただ駆けつけてみると、この数ヵ月現れなかった物の怪が現れた。見事調伏された物の怪は、院の殿お一人に申したいことがあるという。院のあまりのお嘆きの様子を見て、つい姿を現してしまいました。さとられてはならないと思っておりましたのに。髪を振りかけ泣く様子は「ただ昔見たまひし物怪のさまと見えたり」——二十五年前の御

息所の生霊—そのものと見えた。

葵の上に取り憑いた物の怪も、紫の上に跳梁した物の怪も源氏のいない時であった。葵の上の時は葵祭り（御禊の日）の車争いを契機に、紫の上には、葵祭（賀茂祭）の日どちらも神事の日であった。¹⁵

ともかく物の怪は正体を現した。しかも六条御息所の死霊として。同じ葵祭の日であり源氏に容易に推測しやすかったのは確かである。

源氏の紫の上への手厚い献身的看護を見過ごすことができず物の怪はつい姿をみせてしまった、という。女三宮の降嫁以来心労の絶えなかった、その紫の上に突然、なぜ御息所の死霊が跳梁したのか。葵の上と違い、紫の上には直接御息所に取り憑かれる理由がない。強いてあげれば、源氏最愛の人が紫の上であり、自分の退場と入れ替わりに浮上してきた人ということだ。

源氏が紫の上に語ったことは、御息所に対する過去の悔いと良心の咎めであった。一方、御息所の霊は中宮（前斎宮）の処遇に感謝しつつ、対の上との語らいで嫌な女と言われたこと、庇いもしない源氏への恨みであった。続いて源氏は仏神の加護が強く、近づけないという。これは源氏の超理想者、絶対者の姿を表しているだろう。

しかし私は、ここに女の感情の方向性を読みとれると考

える。つまり、男女の情愛関係において嫉妬に基づく恨みは、真に向かうべき相手である男に向かわず、同性の女に向いてしまう。作者もこのことを十分承知していたのではないだろうか。死霊は御息所を嫌な女だといひ、生前冷酷にあしらった源氏に取り憑くべきであったのに。

これについて大朝氏が卓見を述べられている。¹⁶

紫の上の病が御息所の仕業と判明したとき、物語の上での紫の上の病の意味が決定される。…紫の上の病は、源氏に働きかけてきた運命の現れであるといわねばならない。…柏木密通は源氏自身の運命に外ならない。

さて、源氏の出家を願った柏木は、紫の上の病という偶然で（二条院に移られた）、六条院に物理的空間ができるという、期待したのと同じ状況を手に入れた。それは結果として、女三宮柏木密通事件を起こし、不義の子薫を誕生させた。これは藤壺中宮との密通を源氏の前に暴きたてることになり、父院に思いを馳せるのである。

故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らぬ顔をつくらせたまひけむ
(若菜下)

と自分の罪が生々しく甦り、空恐ろしくなるのである。

一方、女三宮への執念を棄てきれない柏木は、御姉君の二宮を北の方にお迎えなされた。が、朱雀院五十賀の試案の夜、病をおして参上した柏木は、源氏の痛烈な皮肉を浴び睨まれていらひ、それがもとで病状が悪化し、一途に死を願う。父大臣は様々な修験者に占わせ、陰陽師などは、「女の霊」の仕業というが、柏木は一笑にふす。

真実あの方の執心がこの私の体に取り憑いているのだ。たら、愛想の尽きたこの身も大切に思われることだろうよ。柏木は自分の病が物の怪のせいではなく、源氏に睨まれたせい―女三宮との密通のせいと、はつきり自覚している。

では、なぜこの柏木に物の怪を出現させなかったのだろうか。柏木自身、物の怪でもいいから女三宮の自分に対する執念の一かけでも…と望んでいるのに。作者は故意に登場させなかった。それは、女三宮に一顧だにされない柏木の孤愁が、物の怪さえ憑かない柏木の絶望的愛が浮き彫りにされるとともに、本人の内的苦悩も理解しないで、ただ物の怪のせいにする古代人、作者にとっては当代の、非合理が批判的に描かれたのではないだろうか。

源氏は老いを意識させられ、かつて傍若無人に振る舞えた若さの罪深さを思う。いま、そこに流れた人生の総重量が源氏をそのように変化させたのだ、といえるだろう。¹⁷

さて、女三宮の出家にも六条御息所の霊が介在したのであるが、密通の露見に始まり、不義の子薫の出産に際しての源氏の冷淡さ、その間の宮の恐れ、苦惱。女三宮の出家の意志は固いものであった。

わが身つらくて尼にもなりなばやの御心つきぬ（柏木）

この後、父朱雀院が下山して来て、女三宮を出家させる。父院は驚愕もせず、すぐに受戒させてしまう方向で源氏に話す。反対する源氏に、物の怪の教えであっても、したがって悪いことならともかく、病人の最後の頼みとあらば無視すれば悔いを残すでしょう。何もかも承知しているかの朱雀院は、娘宮の出家後の生活も考える迅速さである。

後夜の御加持に物の怪がでて、

かうぞあるよ、…取り返しつと一人をば思したりしが…
このあたりに…さぶらひつる。今は帰りなむ、とてうち
笑ふ。（柏木）

紫の上に憑いた霊は源氏の悲しみに同情する極めて人間臭い霊であった。では女三宮に憑依した霊は？

結局御息所の死霊の意味はなんであったのだろう。

女三宮には、出家に至るまでに十分な内的必然があり、紫の上の場合も同様である。その上での突然とも思える出現であった。両方とも源氏が昔冷淡に扱った御息所の霊である。源氏の心の痛みに必ずといっていいほど回想される御息所である。つまり、霊は源氏に憑くはずのものであるのに、いわば、身代わりの形で二人の女性に跳梁した。

しかし、その後、二度と現れなかった。

紫の上の病も、女三宮の出家も、実は源氏にその因があり、源氏が病と出家に追い込んだのだといえる。それを源氏の立場でいえば、自分にその因のある御息所の霊であるから良心の呵責とともに御息所を幻視したものである。

その後霊が出現しなかったのは、秋好中宮のもと、六条院が繁栄し続けていることが御息所の鎮魂に繋がったということであろうか。¹⁸

物の怪側からいえば、生霊は憑く御息所側に必然があり車争いを中心にした源氏や葵の上の冷淡な態度ゆえ。

死霊に即していえば、取り憑かれる方、紫の上も女三宮にも、必然があった。二人とも、源氏の冷たい態度や無理解からの心労と思われる。その意味で御息所の霊は源氏から出て源氏に帰結していくのである。

結局、源氏が葵の上を可愛らしく感じ初めて心の交流があったとき、紫の上は、病で骨身を削るように看病すると

きに。女三宮の出家に際しては、宮が病み瘦せ、頼りなげであるのを過ちを許す気になると感じる。どれも源氏が妻を心底からいじらしく思う時に霊は出現したと思われる。

結び

今まで、六条御息所の造型、作者の意図などを探ってきたが、『源氏物語』の外的内的真迫性をもって描かれた「生霊」「死霊」は、物語に厚みとふくらみを増し、読者に強烈に迫りくる。その物の怪の側にたち、憑く者の心理、必然を冷徹に見据えた人、紫式部は女の生を深く鋭く刺すように見つめる。物の怪は「をのが心の鬼」―良心の呵責という科学的捉え方をした作家がこの時代にいただろうか。物の怪にならざるをえなかった六条御息所に、作者は何を語らせ、何を託したのであろうか。

人間の深いところで六条御息所を、物の怪を捉えている作者の、深い洞察と鋭いまなざしは、この当時の「一夫多妻制」の女にもたらずものが、どれほど非人間的なもの、どれほどの屈辱であったかを一つには語りたかったのではあるまいか。一方、女そのものの内なる絶叫も描いている。嫉妬なるものが社会の悪徳であり、しかも一夫多妻制に対する唯一の抵抗であった時代、女の愛の情念が、この一夫多妻制の不合理を、最も非人間的なものとして追求するのは

当然であろう。当時の社会制度で、世評と己の充足のせめぎあいの中、この制度の矛盾が浮き彫りにされてくる。こうした自己主張を悲劇的にしか捉えられなかったことに、古代社会の病根があり、この自己主張の悲劇的象徴が生霊事件であるだろう。

その意味で、六条御息所は紫式部の分身でもあると言えるのである。

注

- (1) 玉上琢弥『源氏物語の研究』「物語音読論序説」『源氏物語の読者』角川書店 S 51、10
- (2) 橋本真理子『源氏物語の探求第二輯』「六条御息所試論」笠間書院 平9、11
- (3) 以下本文の引用はすべて『完訳日本の古典』小学館 校註、訳者 阿部秋生、今井源衛 S 62、による。
- (4) 大朝雄二『源氏物語正編の研究』「葵巻における長編構造」桜楓社 S、50
- (5) 小林美和子『国語と国文学』「福線型叙述の物語における効果」 S、50、12

吉海直人『論叢中古文学5』「源氏物語の人物と構造」笠間 S、57、5

坂本 昇『源氏物語必携』「源氏物語の中人物論―六

条御息所」秋山虔編 学登社 S 57

(6) (4)におなじ

(7) (4)におなじ

(8) 藤本勝義、『源氏物語』の「物の怪」分学と記録の間
笠間書院 平5、6

(9) 橋本真理子②におなじ

(10) 紫式部『紫式部日記』(3)に同じ

(11) 『新編国歌大観』『紫式部集』 角川書店

(12) (8)におなじ

(13) 野村精一『源氏物語の創造』「六条御息所の人間像
—六条御息所」桜楓社 S、49、9

(14) 今井源衛『完訳日本の古典 源氏物語』小学館
巻末評論S、62

(15) (8)におなじ

(16) (17) (4)におなじ

(18) 日向一雅『源氏物語の主題』「怨みの鎮魂」—源氏
物語への一視点—桜楓社 S、58、5